

小松達也著「通訳の英語 日本語」文春新書、文藝春秋社 2003年5月20日刊を読む

中、上級への道は読むことから

### 1. なぜ読むことが効果的か

(1) お天気や買い物など簡単な会話はできるようになるだろうが、それ以上のレベルにはなかなか達しない。私はその理由の1つは、英語を読む訓練をしないことにあると思う。英語の上達に読むことが必要な理由を3つあげよう。

#### 英語との接触量

英語力向上のためにはかなりの量の英語との接触が必要である。そのためには英語を読むことが1番現実的な方法だ。

日常生活で英語を聞く機会は意外に少ないものである。その点読むことなら、やる気しだいで接触量を増やし、続けることができる。英語を読むことを通して長期的に英語との接触を保つ、これが英語上達のための近道である。

#### 話すことにつながる

(ア) 英語を話せるようになるためには、必ずしも話す訓練をする必要はない。読む、聞くといったインプット面の学習も、話す、書くというアウトプットの力の習得に非常に効果的なのだ。赤ちゃんが母親などまわりの人たちの言葉を聞いているうちに自然に母国語を覚えるように、外国語の習得においても、読む、聞くというインプットの量を増やすことによって話せるようになるのだ。

(イ) 「インプット仮説(Input Hypothesis)」と呼ばれる理論がある。アメリカの言語学者ステューベン・クラッシュェンが1985年に発表したもので、通訳の経験からも説得力のある理論だと思うので簡単に紹介したい。

(ウ) その主旨は「人間はインプットを多く受けることによって言語を習得する。そのインプットは学習者が理解できる範囲のものでなければならない。そしてインプットの量が十分であれば、その言語のアウトプット(話すことと書くこと)の力の習得にもつながる」というものだ。いいかえれば、無理なく理解できる外国語のインプットを蓄積してゆくと、その言語を話せるようになる、という理論だ。

(エ) そしてクラッシュェンは、インプットの中でも読むことを特に重視する。“The Power of Reading”という著書の中で彼は、リーディングは外国語の習得において初級者のレベルと上級者のレベルのギャップを埋めるベストの方法だ、と強調している。

(オ) 私もこの理論に賛成だ。私は何よりも読むことによって同時通訳に必要な英語力を維持し

てきた。今でも通訳の仕事の直前にはできるだけ多く英語を読む。あまり英語を聞いたり、話したりする機会はないからだ。速く読んで内容がずっと頭に入れば、これで自分の英語力は落ちていない、同時通訳もできると安心する。英語を読むことが、話すことにつながると私が信じているのは、このような体験の裏づけがあるからだ。

### ボキャブラリーと知識

(ア)ボキャブラリーはいうまでもなく英語力の大事な要素だ。特に通訳をやっていると、どんな言葉が出てくるか分からないから豊富なボキャブラリーを持っていなければならない。受験時代は『赤尾の豆単』といわれた小さい英和辞書で頭から英語の単語を覚えたものだ。しかしこんな方法はもう古い。

(イ)ボキャブラリーは英文を読むことによってコンテキストの中で覚えるのが最も常識的な方法だ。たとえば1冊本を読むと同じ単語が何度も何度も出てくる。最初は辞書を引かなければ分からなくても、やがて辞書なしで読めるようになる。意識してメモしておけば、「分かるだけのパッシブな語彙」から、話す時にも使える「アクティブな語彙」にすることもできる。

(ウ)また読むことは考えることでもあるから、英文を読むことによって英語の論理が身につく。「英語で考えよ」というが、それは具体的には英語的な論理で考えることに慣れる、ということの意味する。読むことによって当然知識も増える。知識は言葉の力の大切な要素である。特に成人の学習者にとっては、知的な方法で英語を学ぶことは大切だ。その上、頭を使って身につけたことは簡単には忘れない。英語上達のための読むことの効果に分かっていただいたと思う。

## 2. なにを読んだらいいか

(1)とはいっても英語を読むことは面倒なことだ。しかも、上達につながるためには継続的に読まなければならない。そのためには楽しんで読めることが必要だろう。辞書ばかり引いてさっぱり進まないようでは長続きしない。それではどんなものを読んだらいいだろうか。

(2)まずお勧めしたいのは、初級者、中級者のためにやさしく書き直されたダイジェスト版の読み物だ。Penguin Readers あるいは Oxford Bookworms Library などというシリーズで、丸善や紀伊国屋のような洋書部門のある大きな書店にはたいてい揃っている。両方とも読む人の英語力を TOEIC、TOEFL、英検などによって6つか7つのレベルに分け、レベルごとに使われる単語数を300～400から3000まで制限し、難しすぎないように工夫がしてある。たとえばレベル2は、TOEIC340～410点、TOEFL413～437点、英検3級、使用単語は700語というふうに読者の力によって細かく分けてリライトされている。作品もよく知られた古典から最近のベストセラーまで非常に多様で、好きなものを選ぶことができる。3～4年前にアメリカで大ベストセラーになったアーサー・ゴールデンの“Memoirs of a Geisha”(邦訳『さゆり』文藝春秋)という本がある。京都の芸者の一生を描いて話題になったが、オリジナルの英語で読むのは正直大変だ。私もペーパーバック版を買ったが、読まずにそのままになっていた。この本もやさしくリライトされて

Penguin Readers に入っていたので、買って読んでみた。物語の筋を知り、楽しんで読むには十分だった。オリジナルで読むに越したことはないが、よほど英語を読むことに慣れていないと時間がかかりすぎる。英文を読むことで大切なのは、本1冊最後まで完読することだ。

(3)ダイジェスト版を卒業したら、オリジナルに挑戦だ。たとえば大ベストセラーになった「ハリー・ポッター」シリーズがある。世界中で多くの子供たちに愛されているだけあって、読みやすく面白い。どういうわけかこの本にはイギリス英語版とアメリカ英語版がある。読み比べてみるとほとんど違いはないが、アメリカ英語版のほうがいくらか読みやすいようだ。この本の魅力は、少年ハリー・ポッターが繰り広げる愉快で壮大な魔法の世界もさることながら、テンポが速くて意表をつくストーリーの展開だと思う。著者が自分の子供を楽しませるために書いたというだけあって、読む人をあきさせない。最初は私もお子様向きだと思って軽視していたが、面白くて止められなくなった。子供のために書かれているから英語もやさしく、ストーリーを追って読めるから英語との接触量を増やす手段としてもぜひお勧めしたい。

(4)よく売れているミステリーの本は概してあまり難しくない。出版されれば必ずベストセラーになるジョン・グリシャムやディック・フランシスの作品も、平明な英語で比較的読みやすい。純文学に近いアメリカの人気作家、ポール・オースターやレイモンド・カーヴァーの作品なども日常的でやさしい英語で書かれている。大学の翻訳のクラスに使ったが、学生諸君にもほとんど抵抗がなかった。ノーベル賞作家のアーネスト・ヘミングウェイも平易な文体で知られた人である。しかしあまり無理をするよりも、やさしいものを1冊最後まで読み通すことが大切だ。そうすればぐっと自信がつくし、ボキャブラリーも増える。英語力の向上が実感できるはずだ。

### 3. リスニング—— 知識を生かす

(1)「意味を捉える」という点が大切だ。なぜなら「リスニング」のコツは、言葉(words)にこだわらずに意味(meaning)を捉えることであるからだ。言葉にとらわれず、前後関係によって意味を類推するのだ。内容についてある程度の知識があれば、類推が当たる可能性はかなり高い。

(2)知識を使って話し手の言いたいポイントを類推することだ。それにはいくつかの具体的な方法がある。

その1つは、話し手を知ることだ。話を聞く前に、話し手がどういう人で、どういう目的やテーマで話をしているのかを考えてみるといい。そうすると話の内容がある程度予測できる。そしてその前提で聞くと、大分話は分かりやすくなる。父親は父親らしい話をするし、先生は先生らしい話をする。ブッシュ大統領はいつもブッシュ大統領らしい話をする。話のテーマ、たとえばイラク問題か、国内経済かが分かればかなりの程度に話の内容は予測できる。

次は話の筋を追う聞き方だ。人が話すときには、必ず何かの目的なりメッセージを持っている。それを何らかの論理に従って聞く人に伝えようとするものだ。直接的に言う人もいるし、回りくどい言い方をする人もいる。人それぞれの論理がある。そこで、ここは前提、これは本筋と関係ない、ここがポイントだ、と話の流れを追って話し手の意図を捉えようとする聞き方が必要だ。細かいところは聞き逃しても、ポイントが分かればいいと割りきるのだ。ここでもまた、

話の流れが分かれば、先を予測することができるようになる。

このように知識を生かして類推し、ポイントを捉えるという方法は、言語教育では「トップダウン・プロセス」といわれる。文を構成する語句に捉われず、話し手やテーマといったより幅の広い観点から内容を類推するわけだ。英語の力だけに頼らずに、知恵と知識を使おうというアプローチである。このやり方に慣れれば、私たちはみな相当な知識を持っているわけだから、結構大意だけは捉えることができる。対話では大切なのは細部ではなく、大意なのだ。

- (3) 英語を聞くことの実習としては、テレビなどで英語のニュースを見る方法がある。ニュースの英語は早口だし、決して易しくないが、内容がわかっているし、画面があるから何について話しているかは見当がつく。したがってニュースの英語は「理解できるインプット」ということができる。ただし1回聞いただけではよく分からないし、あまり効果はないだろう。何度も繰り返して聞くことが望ましい。

この点で、CNNの“Headline News”は同じニュースを何度も繰り返すから便利だ。もう一つお勧めしたいのは、同じCNNのラリー・キング・ライブ(Larry King Live)というプログラムだ。20年以上続いている、アメリカで最も評価の高いインタビュー番組で、それこそ大統領から、閣僚、経済人、芸能人、一般市民などあらゆる分野の「時の人」が登場し、突っ込んだ議論をする。日本語の吹き替えがしてあるが、副音声にすれば生の英語で聞ける。これをテレビからカセットに録音し繰り返し聞くといい。さらにCNNのホームページ([www.cnn.com](http://www.cnn.com))でインタビューのトランスクリプトをコピーすれば、目で文章を見ながら英語の音声を聞くことができる。リスニング力の向上には1番いい方法だ。アメリカや世界の出来事もビビッドに分かるし、労を惜しまなければ素晴らしい材料だと思う。ぜひお勧めしたい。

#### 4. 話すときは意識的に

- (1) 少しでも時間をとって意識的に英文を作ろうとする工夫が必要だ。学習によって英語を身につけた者と、英語のネイティブ・スピーカーとの大きな違いは、ネイティブ・スピーカーは自然に英語が話せるのに対して、私たちは意識して英語の文を作らなければならないという点だ。“Hello, how are you?” “Fine, thank you.” “It is fine today, isn't it?”のような簡単な日常会話の場合は、模倣とパターンと記憶によって話すことができる。しかし一歩進んで自分の意見を英語で表現するためには、考えて英語の文章を作らなければならない。

具体的には次のような作業を意識的にすることが必要である。

頭の中で言いたい事を整理する。

それぞれの言葉に英語の語句を当てはめてみる。

何を主語にし、何を目的語にするかなど文の構造を考えてセンテンスを作る。

それを口の中で唱えてみて覚える。

発言する。

- (2) このように意識的に文章を作る時に必要なのが、英語の構文、すなわち文法の知識である。幸いにして英語は規則的な構文をもった言語だ。

言語学に革命をもたらしたチョムスキーは、“English is a structure-dependent language.”——「英語は構造依存型の言語だ」と言っている。

だから文法に従って構文を作っていけば、誰でも正しい英語が話せる。

英語の構文は基本的に S(主語) + V(動詞) + O(目的語)だ。

動詞には他動詞と自動詞があり、自動詞の場合は目的語はとらない。

この形ともう1つ “It(They) is(are) ~ ”、あるいは “There is(are) ~ ” という be 動詞型の2つがあると覚えておけばよい。

その形に従ってセンテンスを作り、それを and、but、so のような接続詞で結ぶ並列文か、when、if、because など結ぶ主文・従文構造かどちらかでつないでゆけばよい。

これに適切な語句を入れ込んでゆけば、ネイティブ・スピーカーに劣らない立派な英文ができるのだ。

- (3) 私は犬のスヌーピーが活躍する人気漫画 “Peanuts” が大好きだ。チャーリー・ブラウンやルーシーなど登場する子供たちの可愛らしさもあるが、彼らが話す英語が非常にきちっとした、まともな英語であることが大きな理由だ。決して子供たちの会話で想像されるような、くだけた俗語っぽい英語ではない。私たちが中学や高校で習った通りの英語なのだ。このことは英語が構文に従って規則通りに作られる言葉であることを示している。私たちが文法通りに単語をつないでゆけば正しい英語が話せることになる。決して俗語や省略形の表現を使う必要はない。早く話す必要もない。先に示したステップでゆっくり話してゆけば、自分の意見を表明することは十分可能だ。

- (4) それでは話すことの練習はどこで、どうやってすればいいのか。読むこと、聞くことなどのインプットの蓄積に加えて、アウトプット自体の練習も必要である。ところが話すことの練習には相手がいる。日本では、外国人の友人でも持たない限り、直接英語を話す練習をする機会は少ない。でもあきらめてはいけない。自分を相手に話すという手がある。独り言である。先に述べたように英語は文法に忠実な言葉だから、自分で文章を作って口に出せばちゃんと相手に通じる文章になる。独り言でも口に出してみれば、構文におかしいところは分かるから直すこともできる。私は風呂へ入っているときとか、出勤時の駅への道すがらなどに1人で英語をつぶやいてみたりする。妻は、夫は変人だと思っているかも知れないが、これも1つの練習法である。話す練習をするのに外国の人を相手にする必要は必ずしもない。

(5) 海外旅行をする機会があったら、できるだけ英語圏の国に行こう。趣味と実益を兼ねることは常に最も有効な手段だ。そして向こうへ着いたら、恥ずかしさを克服してできるだけ英語を使ってみよう。ホテルではフロントの人やベルボーイに、レストランではウェイターやウェイトレスに、お店では売り子の人に、そして表通りでは通りかかった人にどんどん話しかけるのだ。お天気や景色の話、その日の朝のニュース、日本との違い、相手のネクタイなど身につけたものをほめるのもいい。なんでもいい。とりとめのない話をしよう。こうした身近な話題による、ちょっとした会話を“small talk”というが、話すことに上達するにはスモール・トークが大変役に立つ。言葉少なで控えめなのも奥ゆかしくていいものだが、外国語をマスターしようと思ったら“talkative”(口数の多い)になることが必要だ。おしゃべりというのではないが、できるだけ多くの言葉を発するのだ。言葉の学習だから、言葉数が少なくても練習にならない。

(6) もう1つは英語を書くことだ。書くことは話すことと違って時間を取るけれども、非常にいいアウトプットの練習になる。最近では、Eメールで英文を書く機会も多いことと思う。スピードとメッセージが主眼であるEメールでは、あまり名文を書こうと思わないで相手に分かるように、意味が伝わるように書くことが大切だ。“Speaking on paper”という言葉がある。文字通り、話すように英文を書くという意味だ。そのときにはキーワードというコンセプトが役に立つだろう。適切なキーワードが見つければ、それだけでも意味は伝わる。書くことは英語の4つのスキル(読む、聞く、話す、書く)の中で最も難しい。何十年も英語をやってきた私も、英語の文章を書いてネイティブ・スピーカーに見てもらおうと、真っ赤に訂正が入って返ってくる。しかし、Eメールはぐっとインフォーマルで気楽なメディアだ。外国の友人が送ってくるEメールをみても、文法的にもおかしいような文が多い。言いたい内容にもっぱら重点を置くからだろう。この点で英語によるEメールはとてもいいアウトプットの練習だと思う。相手に失礼にならないようにだけ気をつけ、練習のつもりで書くといい。

## 5. その他の実践的ヒント

### (1) 誤りを恐れない

「誤りは水の中に水素があるようにある」(小林秀雄)

外国語としての英語を学ぶ人が多くの誤りを犯すのは当然である。

「誰もあなたの誤りを数えはしない(Nobody's counting your mistakes.)」(バーナード・チョシード教授)

話すこと、意味が通じることが大切である。英語の冠詞を落としても、前置詞を間違えても、意味は大体通じる。できるだけミスをしなないように意識することは必要だが、何よりもまずものを言う、できるだけ多く言うことが大切だ。分からなければ相手が聞きなおしてくれるだろう。身振り、手振りを交えるのもいい、勇気をもって気軽に話そう。それが話せるようになる最善の方法だ。外国語の学習に関しては、「沈黙は金」ではなく「沈黙は禁」である。

### (2) 基礎的な文法の誤りに気をつける

(先に)言ったことと少し矛盾するようだが、基礎的で簡単な文法上のミスはできるだけ避けた

いものだ。具体的には、単数、複数による名詞形や動詞形の一致、たとえば“five book”ではなく“five books”、“He like beer.”ではなく“He likes beer.”。それに動詞の現在、過去、未来などの時制。たとえば、“I visit her yesterday.”ではなくて“I visited her yesterday.”。“They come to Tokyo next month.”ではなくて“They will come to Tokyo next month.”。そんな簡単な間違いはしないと思われるかもしれないが、通訳者ですら時折こんな基礎的な誤りを犯す。それは母国語である日本語に影響されるからだ。

こういうエラーは母国語からの「マイナスの転移(negative transfer)」といわれる。日本語の文法には単数、複数による語形の変化がないし、現在、過去、未来のような時制の違いによる動詞の変化もはっきりしていない。だから私たちは英語で話す時、無意識にこういったミスをしてしまう。日本語には冠詞もないから、我々は冠詞の使い方も苦手だ。つつけるのを忘れてしまう。これを直すためには、簡単な文法上のミスは犯さない、と意識しなければならない。単数の普通名詞には原則として必ず“a”か“the”の冠詞がつく。このような基礎的な文法は学校で習って知っているはずだから、話すときに意識さえすれば新しく英文法の知識を仕入れなくてもできることだ。そして、しばらくその努力を続けているうちに習慣になる。簡単な文法的ミスがなくなれば、英語力の初級から中級への脱皮が実現できる。

### (3) 音声面のコツ

日本語と英語の違いから、いくつかの問題点がある。私たちの英語をより聞きやすくするために、2、3気をつけるべき点をあげておこう。

子音の後に母音を入れない。

日本語の音節には、か、さ、たのように子音に母音が結びついたりいわゆる開音節(open syllables)が多い。この影響で、英語には母音がないのに、日本人の英語の発音では子音の後に母音がついてしまうことがある。“But”が“but-o”になり、“ball”が“ball-u”になるといった傾向だ。これは1種の日本訛りで、軽いものであればご愛嬌だが、あまりはっきりすると耳障りで分かりにくくなる。また、シラブルが1つ増えることになるので、話すスピードも遅くなる。これは日本人英語の好ましくない傾向の1つだ。意識して直した方がよい。この癖は英語の綴りを意識して気をつけさえすれば比較的簡単に直る。

強勢(stress)に気をつける

(ア)話し言葉ではリズムが大切だ。私たちが母国語のようによく慣れた言葉を話すときには、内容によって自然の感情がうつり、話にリズムができる。いわゆるイントネーションである。音声学ではプロソディー(prosody)という。これが話の意味を通じさせる上で大きな役割を果たしている。

(イ)英語のリズムは、1つ1つの単語の持っている強勢(ストレス)によって決まる。辞書を見ると各語の発音記号の上に´というマークがついているが、これがストレスのおかれるシラブルだ。たとえば、写真の“photograph”は第1音節に強勢があり、写真家の“photographer”は第2音節に強勢がある。このストレスの変化が英語のリズムを作る。英語の文章の基本的なリズムは、弱強格(iamb)といわれる弱-強-弱-強というリズムだ。も

ちろんさまざまな単語が並ぶから、規則正しくはいかないが、耳に響きの良い英語の文章を聞いていると、このリズムのラインが多い。このようにリズムの基本となるストレスは大切だから、単語を辞書でひいたら必ず強勢の位置を確かめる必要がある。英語の音声面では、個々の音節の発音より文全体のイントネーションとリズムが大事だ。

#### 大きな声で話す

英語を話す時は、大きな声で話すことが大事だ。声が小さいと聞こえ難いし、説得力が弱くなる。ぼそぼそ話す人は進歩しないと思う。大きい声で話すと、相手にも自分にも間違いがすぐ分かる。そこで直そうという意識が自然に働くと、人も直してくれる。また大きい声を出すことに慣れると、必要な時は小さい声で話すこともでき、話し方に幅ができる。是非意識して大きい声で話すようにしましょう。人は必ず耳を傾けてくれるだろう。

P176 ~ 195

#### [ コメント ]

本書は、20 数年前に NHK テレビの対談形式の英会話の番組を担当なさっていた小松達也先生による英語学習方法のテキスト。同時通訳者になるための具体的手法が数多く述べられているが、一般の英語学習者にとっても、また、英語を教えることを職業としている英語教師にも非常に有益な一冊と確信する。英語の学習者として、また、指導者としてどのようにして自分自身の英語によるコミュニケーション能力を毎日向上させたらよいか、とても丁寧に述べられているからだ。

プロの英語教師として学習者に自覚を促し、また、英語の効果的な学習方法を指導する際に、本書を購入し熟読した上で是非活用して頂きたい。

- 2009 年 9 月 10 日 林明夫記 -